

埼玉育ちのグローバル人

文教大学文学部 准教授

福田倫子さん



「グローバル人ってどんな人?!」

第1回 海外に住んでみたー多数派でない私



このエッセイの依頼をいただいてから、「私はグローバル人と言えるのか? グローバル人ってどんな人なんだろう?」と自分に何度も問い掛けています。果たしてエッセイを書き終わるころには答えが見つかるのでしょうか。

海外に住んでみたー多数派でない私

日本語教師を目指したものの・・・

私の出身地、島根県益田市は小さな地方都市で、外国人を見かけることなんて年に数回あるかないか、高校を卒業して大阪へ行くまでは新幹線に乗った回数も片手で数えられるほどでした（私の家族があまり遠出好きでなかったことも理由の一つですが）。そんな自分が外国で生活をしたり、毎日外国人と話す生活を送ったりするなどは予想だにしていませんでした。

日本語教師の道を選んだのは、やや消極的な理由でした。将来どうしようかなと漠然と考えていた高校時代、言葉が好きで教えることも好きだけど英語がそれほど上手でもないことに気づいた私は、「日本語ならできるけん日本語を教える仕事がええかもしれん」と大阪へ進出、大学で日本語教育を専攻したのでした。初めて日本語教育の実習をした時の学習者はオーストラリアの高校生で、強烈な異文化に遭遇しました。帽子を被ったまま授業を受け、途中で自由に立ち歩き、教室の後方に置いてあるリンゴを取りに行くと頬張る生徒も

いるのです。実習の授業内容は覚えていませんが、「これがオーストラリアなのか」と物凄い衝撃を受けました（今考えれば全てのオーストラリアの高校がこのような授業風景でないことは分かります）。大学での学びや経験は興味深いものでしたが、時代や周囲に流され、自分の日本語教師としての適性にも限界を感じ、そのまま大阪で企業に就職してしばらく会社員をしていました。

夢に向けて再出発

しかし、「やっぱり日本語教師の夢は諦めきれへんわ」と、大学院受験という無謀な挑戦をし、なんとか広島で大学院生になることができました。何歳も年下の同級生や先輩に囲まれ、一から修行のし直しです。一度「業務用」に働くようになった脳を「学問用」に戻すのは、「ぶち（広島弁で「とても」）大変」でした。幸運なことに修士の2年生から日本語講師のアルバイトをする機会に恵まれ、県の公的機関や日本語学校など複数の場で教えていました。自分の知識にもスキルにもまだ自信のない私は、毎回授業が始まるのが怖くて準備した教案を何度も見直していました。そこで初めて出会う未知の国の人々、アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパ、北米、南米。学習内容は同じでも、学習者の国や地域、年齢等の属性によって練習方法やフィードバック（反応）を変えたほうが効果的であることに気づかされたのはこの時期でした。

当時の私にとってこういった特徴を掴んだことは授業を進めるうえで大いに役立ち、少し自信をつけました。

海外での日本語教師経験を積むために

マレーシアへ

大学準備教育および大学1年生の日本語教育を行うプログラムに採用され、博士課程に入学してすぐ、マレーシアで日本語教師として働くことになりました。入国当日のことを今でもよく覚えています。スタッフの皆さんが空港まで迎えに来てくださり、夕食後コンドミニアムの部屋に案内してもらいました。木製のドアの手前にもう1枚鉄格子のような金属製のドアがあり、「安全じゃないんだ」と一目で認識させられました。異国の、安全ではないであろう部屋で一人、布団も枕もないベッドで眠る心細さは身に沁みました。



写真1 スタッフルーム

(やはり入口に鉄格子のような金属製のドア付き)

明るくなってみると、コンドミニウムは声が反響するような広いリビングにベッドルームが2つ、広いキッチンがある綺麗な部屋でした。ワクワクした気持ちで生活が始まったのも束の間、11階なのに少しでも食べ物を落とすと大きな蟻がどこからともなく現れてたかり、水道水はなんとなく色がついていて10回も洗濯をすると確かに白だっ

たシャツが茶色に近づいていき、朝6時前にはお祈りの放送が大きな音で鳴り響いて目が覚めました。街に出れば、タクシーの運転手にメーターを早回しされても言いたいことを英語でうまく言えず、巨大なショッピングモールでは欲しい物が見つからず、店員には笑顔無し。高揚感はあるという間に減速していきました。なんとなく不便、なんとなく不自由で、小さな不満がたまっていました。

プログラムには、ベテランの男性の先生が4名に同年代の日本人女性の先生が8名、他に理系の専門科目に日本人とマレーシア人の先生方がいらっしゃいました。同僚に恵まれ、仕事は楽しんでいましたが、授業に慣れるまでには少し時間がかかりました。学生たちは日本の大学へ進学するという明確な目的があるため向上心もあり、素直で本当に可愛かったのですが、日本語が話されない環境で学んでいる学生たちの表現はストレートで、グサグサと心に刺さるものもありました。「先生の授業は面白くないよ。〇〇先生（他の先生）は面白いよ」、「先生の例は分からないよ」、私『ちびちび』という言葉は『お酒をちびちび飲む』という風に使います。言いましょう」学生「私は（ムスリムで）お酒を飲まないから言いたくないよ」などなど。ただでさえ満足いく授業ができない自分に苛立っているところに、追い打ちをかけるような学生からの厳しい評価は堪え、少しだけ積み上がっていた日本語教師としての自信はもろくも崩壊しました。

そんなカルチャーショック、授業ショックの日々の中、卑近な話で恐縮ですが、コンドミニウムでトイレ掃除をしていました。その時ふと、「世界中どこにいても生きていくためにすることは同じ。私は私として生きていくのだ」という閃きが天から降ってきたのでした。荘厳な教会で、とか、壮大な夕日を見て、だとカッコ良かったのですが、

なぜかトイレ掃除中の出来事でした。シュンとしている時間はありません。私は私として成長するため、学生の厳しい声を思い出して奮起しました。もう二度とあんなこと言わせない、と他の先生や他大学の授業を見学したりしました。学生にも生活習慣や興味を持っていることなどについてよく聞くようにしました。また、マレーシアについて知るために、マレー語の勉強をしたり、マレーシア料理を習ったりしました。少しずつ成果が表れて授業にも慣れ、茶色っぽいシャツも味があるな、と思えてきたころ1年の契約が終わり、日本に帰国しました。

マレーシアでの1年間は、日本語教師として成長させてくれただけでなく、私がそれまでいつも多数派に属していたことに気づかせてくれました。同じような価値観を持ち、常識と呼ばれる通念があり、共通点の多い文化や習慣を持った人々に囲まれていたのです。ですが、少数派として入り込んだ私が知らない文化、習慣、常識がこの国にはあり、それらを理解し合わせていくのか、理解するだけで自分は自分の在り方を貫くのかを選択する作業を常に行っていたように思います。

さてさて、私はマレーシア滞在の経験で「グローバル人」に近づけたのでしょうか。



写真2 マレーシアの学生たちと

(第二回へ続く)